

とうみぎ

実家の畑には様々な自家用野菜が植えてある。毎年夏になると畑は茶色と緑色の絨毯に覆われたようになり、トマトの赤や紫のシンの葉っぱが健康的な彩りを加える。キュウリや茄子、スイカにメロン。食べ物に好き嫌いのない私にとっては畑一面が大きな皿のようである。母が自家用のために作った野菜だから形や色などはまちまちで、みてくれが良くないものもたくさんあるが、何よりも新鮮で安心できる。

私は、トマトを嫌いだと言う人に会うと、畑に入ってもぎったトマトを冷水で洗い粗塩をつけて食べれば良いのになあと、気の毒に思ったりする。ともかく、今年もギラギラと輝く太陽の下でたくさん野菜がなっていた。

お盆の頃になると、我が家にはたくさんのお親族が集まる。そして必ず、種まきから蒸かしまで完全自家製のとうもろこしが出される。

幼い頃、私は家族と同様にとうもろこしを『とうみぎ』と呼んでいた。母の手伝いで、畑からとってきたばかりのみずみずしいとうみぎの皮を縁側に座りながら剥いた。とうみぎの食べどきは芯の先の毛でわかる。皮に覆われたとうみぎの先端から出ている毛が、栗毛のサラブレッド馬のしっぽのような色で縮れていれば熟れているサインである。

とうみぎは筍のように皮が幾重にも重なっており、剥いていくと淡い黄色の実がぎゅしりと詰まっている芯にたどり着く。ところどころに虫食いがあったり、実の色がまばらになっているものによく出会う。むしろ店に売ってあるようなみてくれの良いとうみぎに出会う方が珍しい。それがまた、くじ付きのとうみぎのようで楽しかった。

先端の茶色の毛は日に焼かれたためらしく、根本は黄色っぽい緑色をした柔らかい潤

いのあるやさしい毛のようになっている。それをむしり取ると、後は母がとうみぎを蒸かすのを待つだけだった。

蒸かしたばかりのとうみぎにタオルをかけ、しばらく冷ますと、自然の恵みいっぱいのおやつになった。幼い私は庭先で、逆手で鉄棒を持つようにとうみぎを握り、口いっぱいに頬張った。むしゃむしゃと遮二無二食べた。とうみぎのかすがあちこちに散乱し、手はべたべたになり、お世辞にも上品といえる食べ方ではなかった。また、とうみぎの一つ一つの皮が魚の鱗のように歯と歯の隙間に挟まって、後に残る食べ方でもあった。

しかし、噛みつくときに実を砕くためなのか、とうみぎの一粒一粒の実の中に貯まっていた汁が口の中に広がり、とても旨かった。また、少量のじやりじやりとした粗塩がとうみぎの旨みと甘みをいっそう引き出していた。私は乳歯を抜いて歯っ欠けになった歯を隠すこともなく、あまりの美味しさに満面の笑みを浮かべていた。

私が小学生になると意外なことに気が付いた。私がとうみぎと呼んでいたものを、周囲の友達は何となく『とうもろこし』と呼んでいたのだ。後で知ったことだが、『とうみぎ』は『とうもろこし』の方言ではあるものの、方言にしては東日本のかかなり多くの地方で使われているそうである。北関東にある私の実家も例外ではなかったということだろうか。

小学生の私も右へ倣えの要領でとうみぎをとうもろこしと呼んだ。そして、食べる時も友達と同じように、整列したとうもろこしの実を、四つか五つにまとめて、倒し込むようにかじり取って食べた。完食すると、実を取られたとうもろこしの芯は整列したクレーターのようで、とてもきれいで上品に仕上がった。

さらに高校生になると、私もそれなりにおしゃれに気を遣うようになり、汚れが必要以上に気になるようになった。とうもろこしを

食べるときに唇の両脇に食べかすが付いたり、べたつくことが嫌で、予め手で実をまとめ取りし、食べるようになった。

やがて高校を卒業して、私は大学生になり一人暮らしをするようになった。仕送りはもらっていたが、私の健康を気遣う母は段ボールに米や野菜を入れて定期的に送ってきた。夏になると、定番のとうもろこしが二、三本入っていた。正直言つて母の気持ちはとてもうれしかったが、野菜やとうもろこしという現物はあまりありがたくなかった。そこそこ自炊はしていたけれど、それは気分の乗っているときだけで、野菜が送られてきたときには、野菜を駄目にする前に食べなくてはならない”という義務感で調理をしていた。

蒸かし用の鍋などがあるわけもなく、私は送られてきたとうもろこしを実家から通う友人にあげていた。調理できなかったのも理由だが、特に食べたいとも思わなかった。あの頃の私は、調理や片づけなどのことばかり考え、幼い日のとうみぎの味を忘れていた。

今日、ある内戦終結の十周年という記事を目にした。三十年も続いた内戦。その人たちにとって三十年という年月はどれほど長い時間だったのだろうか。私が生まれてから三十余年が過ぎたが、私にとっても三十年という年月はとても長かった。今までいろいろなことを考えて行動し、後悔したり安堵したりしてきたが、お陰で、年輩の人には少し言い難いが世の中というものを勉強できた。

小さな頃は周りを気にして、とうみぎをとうもろこしと呼んだり、上品な食べ方に凝ったりしたが、私はようやく今になって周りに不快感を与えなければ自分の食べたい食べ方で食べればいいんだということに気付いた。

私が本格的にバドミントンを始めたのは三十歳になってからである。遅すぎるスタートであることはよくわかっているが、高校生や大学生などと同じように練習メニューをこなす、試合だけでなく練習にも全力を尽くして

いる。ただ、熟練者のような、思わず見とれてしまうような華麗なプレーはできず、どたばたと動いたり、体力のなさからよれよれになっている。

そんな姿は嘘でも格好良いとは言えないが、中途半端には終わりたくない。どんなに辛くても最後の最後までチャンスをつなげたり、チャンスをつかむ努力をしたい。

『年甲斐もなく必死になって……』と言う人も結構いるが、何よりも私は一所懸命に取り組んでいるときがとても楽しい。とうみぎが、むしゃむしゃと食べられ無惨で格好悪い食べかすとなっても、私は決してとうみぎが哀れだとは思わない。むしろ、美味しさを十分に表現できたとうみぎが幸せだと思う。

若い頃は何かにつけ、あれこれ意味のないプライドをちらつかせながら考えることが多かったが、今は、下手でもいいから精一杯努力し、幼い頃の美味しいとうみぎを頼張ったときの満面の笑みで振り返られるような試合をしたいと思う。

私は、久しぶりに年甲斐もなくとうみぎを逆手に持ってかぶりついてみた。